
ゼロの使い魔～自由に生きる～

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜自由に生きる〜

【Nコード】

N2890V

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

テンプレの如く転生した主人公が自分の好きなように生活し原作キヤラとちよいちよい絡んでいきます。アンチがところどころ入るの
で苦手な方はUターンお願いします。

初投稿なので誤字脱字あると思いますがなるべくないよう気を付けていきます。

神様？とこ対面（前書き）

初投稿です。

物語に入る前が意外と大変

神様？とご対面

目を開けると見えるのはただただ白い空間だけだった。

「……どこだここ？確か俺は昨日普通にベットで寝たはずなんだが……まさかアレか？例のアレなのか？」

「おぬしが思っている通り例のアレじゃよ。」

「……びびった……。あんたいつからいたんだ？全然気づかなかったよ。」

俺の後ろから声をかけてきたのは白髪に白い髭、先っぽが渦巻いている杖を持っていたいかにも自分偉いんです！と主張しているようなおっさんが立っていた。いつもなら変態だーとか言って逃げるところだが今日は……いや、今は違う！この空間！この変態……おっさん！もう十割十分アレだろ……！

「人を変態だのおっさんだのちとひどくないかの？せつかくおぬしを選んでやったのにそんな態度だと別の人で選びなおすとし……「すいませんでしたー……！！！」……うむ」

このチャンスを逃すわけにはいかない。誠心誠意自分の持てる限りの力を振り絞ってこのおっさん……「ん？」……このお方の機嫌を損ねないよう会話しなくては……。大丈夫俺ならやれる、やってみせるさ！

「失礼ですが確認させてもらいますね？あなた様は神様でよろしい

ですか？」

「違うよ？」

「おお！やはりそうでしたか！お会いできて光栄で……え……？違うの！！！！？え？なにそれこわい。」

俺が神だと思つて一世一代の低姿勢で臨んだ会話はおっさんが実は神じゃなくてただの変態だという事実で幕を閉じた。なんだよこいつー誰だよこいつーもう帰れよーむしろ帰らせろよー

「はあー…じゃそこの変態、あんた何？」

「神じゃないとわかった瞬間その態度かの？変わり身ちと早すぎないかのう？」

「俺の願いを叶えない神もどきの変態に態度についてとやかく言われる筋合いはない。」

まったくぬか喜びだったぜ…。まさかあげてから落とす作戦か？ならばこやつ…できる！！！！

「おぬしの思う神ではないが一応神ではあるぞ？」

なん…だと…？ではやはりアレなのか？あれなんだろうか？あげて落としてまたあげるとは…やはりこやつでき「地獄を管理してる方の神だけどね？おぬしの世界で表現するなら閻魔や魔神に該当する存在なのじゃ。さあ称えてよいぞい？」

魔神！！？きたー！！！！え？これ俺の想像してたのと違う…？俺の想像してたのは神のミスかなんかで俺アボン↓神謝罪↓俺許す。だが転生したいなー↓いいよ↓バブー↓俺TUEEEEE

EEのはずだったんだが。どこで間違えた？いや、最初からか…。

「あのー僕なにか悪いことしました？自分で言うのもなんですが平々凡々に生きてきたと思うんですが。」

悪いことはしてないし、酒もたばこもやってないいい子？だったし地獄にお世話になるようなことはしてない！！はず。ちょっとオタクな19歳だったただけだ

「特にしてないのう。まずおぬしは死んでもないしの。わしがここにおぬしを呼んだのはわしを含めた地獄の神の暇つぶしじゃよ。もちろんおぬしは死んでないのでこれからわしが提案することが納得いかない、嫌だと思ったら断ってくれて構わん。ただしここに来てからの記憶は消させてもらうがね。」

ふむ…あんがいこの自称地獄の神も悪い奴じゃなさそうだな。断っても罰があるわけじゃないし聞くだけ聞いてもいいか。

「それで地獄の神様が僕になんの用ですか？」

「実はおぬしには別の世界に行ってほしいのじゃ。」

「へ？」

「む？あんがい物わかりが悪いのう。おぬしの世界で簡単に言えば転生しない？って言ってるのじゃ」

来たー！ー！ー！ー！！？まさかの閻魔？様からの転生パターン！

「ま、まじですか？じゃあテンプレのごとく特典としてチート機能満載な俺TUEEEEEでよろしいですか！！？」

「テンプラ？ちーと？俺杖ー？なに言つとるがわからんがそれでいいんじゃないかのう」

おおおお！言ってみるもんだな！流石神！！ありがとう神！！（地獄のだけどこのさいなんでもオツケー）

「じゃさつそくで悪いが転生してもらうぞ？転生場所は君の世界の小説の世界『ゼロの使い魔』にいつてもらふ。もちろん拒否権はない。ってかわしもう喋りつかれたわい…ってことでわしらを楽しませてくれ。ああ言い忘れておったが所謂平行世界になるので原作とが気にしなくて好きに過ごしていいからのお。」

「え？チートは？俺TUEEEは？俺の意見わああああああああああああ！！！！！！？」

「あ、ちーとがなんとか言ってたの…。ちーとがなんのことかわからんからあやつが望んでた能力を与えとけば文句言わんじやろ。」

両親とご対面（前書き）

原作と合っていないところなどがでてくると思いますが個人の小説だからと多めに見てもらえればありがたいです。

両親とご対面

??? SIDE

私は今初めて息子の顔を見ている。クリーム色の髪、幼いながらも将来は端正な容姿になると思われる顔。しかし…私に似ているところがあまり見当たらないのは気のせいであろうか…？いや、きっと性格が私に似ているんだな。そうに違いない！！よし、将来私にみたいな立派な貴族にしてみせようはっはっはっはー！

「あ、あなた？どうしたんですか？」

「む？すまないちょっとこの子の将来を考えていてな」

「あらあら気が早いすわね。それより早くこの子に名前をつけてあげてくださいな。」

む、妻に笑われてしまった。そうだな名前を付けてあげねば。

「この子は『アレン・ヴェルミナ・ドファイア』だ。」

「『アレン』ですか。元気に育ってくれるといいですね。」

仲良さげに微笑みあう夫婦。その母親の腕に抱かれている息子。今ここファイア家に第一子である『アレン・ヴェルミナ・ド・ファイア』が生まれた。

アレンSIDE

ん…。目が開かない、体も動かない。あれからどうなったんだ？

「あうああー（誰かー？）」

あ…？普通に喋ってるつもりが声がでてない。というより赤ちゃんの言葉で出てくるといった方がいいのか。ということは俺の転生は赤ちゃんスタートか………下の世話とか恥ずかしいな…。

「あらあら元気ねえ？お母さんはここですよー？」

声がしたと思ったら真正面に顔がにゅっと出てきた。クリーム色の長い髪を持ち灰色の瞳を持つ女性。顔にはいくつもの大粒の汗がにじんでいるがそれでもかなりの美人だと思える。

この女の人が俺の母親か。ってことはこの人のおっp…げふん！あれを飲むのか？吸うのか？神様ありがとう（あ、地獄のね？）子供万歳！！

そんなことを思っていたが急に睡魔が襲ってきた。抵抗しようにもどうにも無理らしい、まあ子供…いや、赤ちゃんの体だから仕方ないか。俺は抵抗するのをやめ睡魔に身を任せあつという間に眠りについた。

アレク3歳（前書き）

他の人の作品で感動した。
俺にあんな作品は無理だ…。

アレク3歳

アレクSIDE

この世界に転生してからなんだかで3年が経った。ちょっと時間が飛びすぎとか思う人もいるかもしれないが数々のSSを読んできたそのあなた達なら大体の予想はついていると思う

簡単に言うと

アレク1歳

「(ヨチヨチヨチ)」

「.....」

「あー(あー歩くのおそー、ってか超疲れるんですけど)」

「え...歩けるようになるの早くね!!?」

アレク2歳

「(スタタタタタタ)」

「.....」

「ちちうえ、ははうえ、おはようございます。」

「お…おはよう…? (え? 最近の子供ってこんな成長早いのか?)」

「あらあら元気ねえ? でも怪我はしないでね?」

「はい、ははうえ。」

「…… (え? なんでもう普通にしてるのか? 私か? 私がおかしいのか!?)」

〈現在アレン3歳〉

とまあこんな感じの生活を送っていたわけだがこの世界には娯楽がまったくといっていいほどない。言い忘れていたが俺が生まれた『フィア家』は公爵らしく家はかなりデカい。ちっちゃい頃よく迷子になって執事に怒られたのは今ではいい思い出だ

そんな俺は今日でめでたく3歳となる。家の中は誕生日を祝うためのパーティーの準備があるらしくメイドや執事たちは忙しそうに走り回ってる

そんななか俺は父上に誕生日プレゼントと言う名の交渉もどきをするために父上がいつもいる執務室に向かっている。体が小さく家がバカ広いせいか目標の部屋に行くのも一苦労だ…

やっとの思いで執務室に着いた。目の前には飾り気はないが一目で高級だろうと思わせるような綺麗な扉がある。ここで最初からわかつていたことだが解決しなければならぬ問題がある…なにせ俺は今3歳だ。知識などがあつたとしてもどうにもならないもの、身長だ。いつもは執事やメイドがいつから別になんてことはないのだが今日は俺の誕生日の準備で忙しいらしく誰も傍にいない。一人ぼっちだ。

どうしたものか…。しばらくドアの前で考えているとふいに声をかけられた。

「アレン坊ちやまどうかなさいましたか？」

声をかけてきたのは俺の専属執事であるラードだ。確か今年で28？かそこら辺だった気がする。

「おおいいタイミングで来てくれた！実は父上に用事があつたんだけどドアが開けられなくて困ってたんだ。でも流石俺の執事だ、困ったときに現れてくれるじゃないか。」

え…言葉が達者すぎないか？なに言ってたんだ？最近の3歳はこれが普通だぞ。現に俺の家族と家臣は普通に接してくれてるし

「それはもう坊ちやまには常識が通じないとみんな諦めてるからですよ（ボソッ）」

「ん？なんか言ってたかラード？」

「いえ、何も？それで坊ちやま、ご主人様にご用事があつたのでし

たらドアに手が届かなくてもノックをすればご主人様がドアを開けてくれたのではないでしょうか？」

「……あ」

「「……………」」

「んっん……！ご苦労だったラード。自分の仕事に戻っていいぞ。」

そうだな、言われてみればノックという方法があつたな。普通すぎて頭からすっかり抜けてたわ……。なんかラードが去っていく時微笑ましいほうな目で見られた気がしたが気のせいだな……うん、気のせいだ。

でわ改めて父上使つて中に入るとしましょうか。

「（コンコン）父上アレンです。お話があるのでドアを開けていただけですか？」

「ん？アレンか、珍しいなちょっと待つてろ。」

返事があつてから10秒後くらいにドアが開き、中からイケメンが出てきた。自分の父親ながらここまでのイケメンだとちょっと殴りたくなるな

「ありがとうございます父上。」

「いやなにこれくらい、どれでどうしたんだ？お前がここにくるなんて初めてだろう？」

父上は首を横に傾けながら聞いてきた。くそっ！悔しいがイケメンだからかちよつと似合ってる！！だがやっぱ自分の父親がやってると思ったらキショイからやめてくれ！！

「今日は父上に頼みがあつてきました。」

「ん？頼みかそれもまた珍しいな。よし、今日はアレンの誕生日だし無茶なこと言わない限り聞いてやろう。っで何が欲しいんだ？お菓子か？ぬいぐるみか？あ、遊び相手ならすぐには容易できないから待っててくれよ？」

「どれも違います父上。今まで読んでた本がに飽きてしまったのでもう少し難しい本が読みたいです。なので書庫に入る許可ください。」

「んー…。別に書庫に入るのは構わないけどあそこには結構難しい本しかないよ？まだアレンには読めないし難しすぎてわからないと思うんだけどそれでも入りたいのかい？」

「はい。少しでも早く魔法に対しての知識を付けときたいんです。父上や母上みたいに立派なメイジになりたいですから。」

「アレン…。お前はまだ3歳だというのにしっかりしてるんだな。よし！なら書庫への立ち入りを許可しよう。だが書庫にいく時は執事やメイドにひとこと言ってから行くように、勝手に行ったら立ち入りを取り消すからな？」

「わかりました！ありがとうございます父上！ではさっそく書庫に行ってみてもいいですか？」

俺はいち早く書庫に行きたいために父上をお願いをする。子供の時期にしか使えないであろう上目使い＋目キラキラだ。俺の顔は自分で言うのもなんだがメイドの間で可愛いと評判なので父上もいちこるなはず！！

「え…？んんーまあいいだろう。リードには私からから言っておくでしょう。夕飯になったら呼びに行かせるからそれまで頑張って挑戦してみなさい。」

勝った！！今の俺ならあの烈風にも勝つる！！！！

「ありがとうございます父上！大好きです！！ではさっそく行ってきますす！」

俺はさっそく部屋を出て書庫に向かった。後ろの方で何かが倒れるような音が聞こえたが今は書庫の方が大切だ、気にしないで書庫に行こう。書庫の場所は前リードに聞いたのでちゃんとわかる。

書庫に着き中に入るとそこには見渡す限り本本本。天井に届くほどの高さの本棚が所狭しと並んでいる様は圧巻の一言にすぎる。

よし！これでやつとあの退屈な子供用本からおさらば出来るぜ！！早く魔法に関しての知識を付けて何の系統でもいいからスクエア…最悪トライアングルにはならないとこの世界では死ぬ。……うん、死ぬね。

これもあの駄魔神のせいだ！チートくれって言ったのになんもねえじゃねえか！今まで一般人で過ごしてきた俺はすぐ死んじゃうよ？ぽっくり（？）逝っちゃうよ？ああ…最初の予定では俺TUEE EEEな感じだったのに…まあ無いものとやかく言っても仕方ないからチートは無理でも頑張って強くなるよう頑張ろう。主に俺の命の為に

グラムSIDE

初めましてになるんだろうか、私はグラム。アレンの父親だ。

今息子のアレンが珍しく私に頼みごとをしている。頼み自体は難しいことでもなく危険もないので叶えてあげるのは容易だがこの子にあそこの本が理解できんのだろうか？確かに他の子と比べて異常なほど成長が早く3歳にして流暢な言葉使いをしているが、あそこの本は私でも理解できないものも多々ある。この子にはまだ早いと思うのだが…

「んー…。別に書庫に入るのは構わないけどあそこには結構難しい本しかないよ？まだアレンには読めないし難しすぎてわからないと思うんだけどそれでも入りたいのかい？」

「はい。少しでも早く魔法に対しての知識を付けときたいんです。父上や母上みたいに立派なメイジになりたいですから。」

私のように…なりたい！！？そうか、アレンは私を尊敬してくれているのか…。

「アレン…。お前はまだ3歳だというのにしっかりとしてるんだな。よし！なら書庫への立ち入りを許可しよう。だが書庫に行く時は執事やメイドにひとこと言ってから行くように、勝手に行ったら立ち入りを取り消すからな？」

しっかりとるとはいえまだ3歳だ。書庫で疲れて眠ってしまつてそのまま風邪でも引いたら大変だからな。本当は私が勉強などを教えてあげればいいんだがあいにく私はガリアの公爵。書類が嫌になるほど多いからそんな暇はない…。残念！実に残念だ！！だがアレン、アレンが魔法を使える年齢になったら私が直々に教えよう。それも親の楽しみの1つなのだから

「わかりました！ありがとうございます父上！ではさっそく書庫に行つてみてもいいですか？」

今私はこの子の才能の片鱗を見た気がした！なんだあのキラキラした目は…！！あの目を前にしてこの子の頼みごとを断れる人物がいるのだろうか…否！そんな人物は存在しないだろう。我が息子ならなかなかやるじゃないか…

「え…？んんーまあいいだろう。ラードには私から言っておくでしょう。夕飯になつたら呼びに行かせるからそれまで頑張つて挑

戦してみなさい。」

「ありがとうございます父上！大好きです！！ではさっそく行つてきます！」

だ…大好き！？ああアレンお前というやつはなんて可愛い息子なんだろうか……。私は初めてアレンから大好きと言われたことの感動を胸にしまいゆつくりと後ろに倒れていった。

アレク3歳（後書き）

文字数などバラバラですがまだまだ書くのに慣れていないので今後
もバラバラになると思います。

アレン4歳（前書き）

1か月以上放置してしまつて申し訳ないです。

これからも休み休みになるかもしれませんが頑張つて書いていきます
と思います

アレン4歳

アレンSIDE

みなさんおはようございますこんにちはこんばんはアレンです。あれから毎日毎日書庫に籠って早1年、ひたすら知識を詰め込みました。

書庫に通い始めたころはもしかしたら暗記能力アップしてるかも！とか速読+完全記憶能力か！？とか思ったりもしました……がやっぱり何の変化もなくひたすら頑張って覚えてましたよ。もうこれは俺TUEEEEEは諦めた方がいいのかもしれないな…

そんなこんなで早くも4歳。そろそろ他の貴族の誕生会や自分の誕生会などで公の場に立つので呼び方を俺から私に変えてみた。最初は自分も呼びなれなかったし父上や母上、使用人達も違和感が…みたいな感じだったけど今ではすっかり慣れたようだ

「アレン、お前ももう4歳だ。そろそろ魔法の訓練をやってもいいと思うのだがどうだ？」

魔法ついにきたーーーー！！

「あなたまだアレンには早いのではないですか？普通魔法の訓練は5歳くらいから始める人が多いですしもしケガでもしたら大変だわ」

「大丈夫です母上！私は書庫で結構な知識をつけましたしなんとなく成功する気がします！なにより早く魔法が使ってみたいです！」

この世界に生を受けてから娯楽もなく暇な毎日を過ごしてきたんだ。一刻も早く魔法を使ってみたい。

「アレンもこう言ってるんだ。それに魔法を使うときは私が一緒にいるからケガなどさせないよ」

「そうですね。では私も訓練の際にはなるべく一緒にいることにしましょう。2人で協力すればさらに安全になるわ。」

「エリー……」

「あなた……」

……うん、優しい両親だと思うよ？息子思いのいい両親だと。でもすぐイチャイチャするのはやめてくれ！俺の魔法はどうなった！？ええい！すぐベッドに行こうとするんじゃない！ああー俺の魔法が遠ざかっていく〜

俺に弟か妹ができるそうです。

アレン4歳（後書き）

今回は短めで。

次回は魔法とアレンの能力について！

書けるといいなあ…

魔法

アレンSIDE

ついに魔法を使う時が来た！

魔法の話が出たのに父上たちが2人きりの空間作るから1人でやっちゃえー！と思ったのに杖の契約とかなんとか言われてから3日。ようやく契約も終わった。

魔法がこの世界に浸透してから6000年？くらい経つのに杖の契約方法が杖となくなく繋がったと思ったらオツケーとか…！どれだけ適当なんだよ

現在私は父上母上と一緒に広場というか空地というか、とりあえず周りに何も無いところにいる。

「ではアレン、これから魔法を教えるわけだがまず得意な系統を調べなければならぬ。私が各系統魔法を順にやるからお前は私の真似をなさい。」

「はい！質問です父上！」

「む？なんだね言ってみなさい。」

「書庫で読んだ本によるとまずコモンスペルから習うのが通常らしいのですが私は系統魔法からいいのですか？」

まあ系統魔法からでいいなら別にそれでいいんだけどね。コモンズペルとかやってて楽しそうじゃないし…

「うむ、アレンの言ってることが正しい。しかし我が家…いや私は系統魔法からでいいと思う。だってコモンズペルとか地味じゃないか？なにアレンなら最初から系統魔法でも大丈夫さ。」

…父上、今私はあなたと親子なんだなと実感してます。

「私も平気だと思いますよ。私たちのアレンですから。」

「わかりました。父上と母上の期待に応えるよう頑張ってやります！」

「ではまず私の得意な土の系統魔法からやるとしよう。錬金といってそこらにある石を様々な物質に変換することができる。良く見ておきなさい、錬金」

父上が錬金と唱えると石が鉄に銀に変わった。

「おお！すごいです父上！！」

「そうだろうそうだろう？アレンもやってみなさい。最初から銀をイメージしてしまうとできないからまずは青銅あたりをイメージしながらやってみるといい。」

青銅かゝ、鉄に囲まれて生きてた私にとって青銅とかイメージしに

くいんだよね…。やっぱりここは鉄のほうがイメージしやすいな！
ごめんなさい父上…私は父上の助言を完全スルーします

「むむむ…錬金…！」

私が錬金を唱えると石が鉄に変わった。おお！初魔法成功……！

「父上！成功しました！！どうですか？」

「う…むう。これが初めての魔法とは思えない。鉱物のなかに含まれている不純物もほとんどない、しかも鉄だと？ライン上…もしかするとトライアングルくらいの精度だ。いや…しかし最初からこのような

ことが出来るのか？……ブツブツ……」

「ち…父上？どうしたのですか？まさかダメでした…？」

一応鉄に変わったから成功したとおもったんだけど…最初は青銅に変えなきゃだめだったとか…？それだとまずい、青銅とかまったくイメージだ出てこない…

「あなた、いい加減になさい。アレンが困ってるでしょ？それにしてもアレンは凄いわねえ最初から鉄を錬金するなんて天才じゃないかしら。」

「お…おすまないなアレン。しかし凄いぞアレン！！鉄を錬金するとはな、流石私たちの子だ！」

良かった成功してたんだ。もっと褒めて褒めて

「えへへ…ありがとうございます父上、母上。魔法楽しいです。」

「ぐはっ！！…やるなあアレン」

「あああら、将来が心配だわ」

…？なにか知らんが父上は悶絶していて母上には将来を心配された！まあいいや早く他の系統も試さなければ

「父上、他の魔法もやってみたいです。」

「あらじゃあ次は私の番ね。私は水が得意なので水系統を試みましょう？私が試しにやるからさっきみたいに良く見ておきなさい。コンデンセイション」

母上が魔法を使うと何もなかった空中に水の塊がでてきた。これ飲めたら水道いらないな…

「成功するとこんな感じになります。ではさっそくやってみてね？アレンならできるわ」

「わかりました母上！コンデンセイション！！」

すると空中に水の塊…？というよりは水の雫みたのが3つくらいポンポンと出てきた。なにコレ？

「母上なんか3つ出てきたんですがなんですかこれ？」

「あらあらなんでしょうねえ？でも魔法は成功してるので素質は問題ないと思うわ」

母上でもわからないのか…まあ水も使えるってわかったらどうでもいいか！父上はまたブツブツいつてるし母上は自分の系統が私にもあつて嬉しいのかニコニコしている。

その後風と火もやってみたけど一応使えるが才能は微妙らしい。土は確実にスクエアまでいくのではないかというくらい、水は頑張ればスクエアも夢じゃないくらいの才能らしい。どうせなら全系統スクエアが良かったけどしかたあいよね。でも錬金が出来て良かった！、これで金には困らないな！……まあ公爵家だから金に困るなんてことないんだけど…

アレン練習中

念願の魔法を使えるようになってから俺は毎日のように練習した。だって魔法だぜ？魔法のない世界からいきなりゼロの使い魔の世界にやってきてようやく異世界っぽいことをやってるんだ、少しくらいテンション上がったって頑張っちゃってもいいだろう？

父上と母上と初めての魔法を使ってから1か月経ったが俺は主に鍊金しか練習してない。石ころが鉄にも銀にも金にもなる夢の成金魔法。楽しくて楽しくてやめられない…。くせになりそうだ…。1か月で成長したかといえば微妙だが楽しいから問題ない。

「アレン、また土魔法の練習をしているの？私と水の魔法も練習しましょうよ。」

母上は俺と水の魔法や秘薬などを作りたいらしいが今はあんまり興味がないからやる気が起きない…。まああんまり土魔法ばつか使っていると母上の機嫌が悪くなるから1週間4日に1回くらいはやるようにしている。

俺の精神力はドットにしてはかなり多いらしいがまだまだ少ない…。両親がスクエアだからかもしれないが最近そう思う。最初は魔法使えるだけでウオーーーーーー！高まるーーーーー！！みたいな気持ちだったが、1か月もするとだんだん慣れてきて欲が出てきた。魔法を毎日練習してるのは精神力を多くする目的もある。限界まで精神力を使ってから回復させると少しずつだが増えるんだとさ。父上が前

説明してたがあまり聞いてなかった方覚えてない、増えればそれでいいだろ？

「母上、水魔法は昨日練習しましたよ？ていうか水の魔法つまらないです。回復魔法は便利ですが怪我したひとが周りにいないので効果がありません。鍊金は石がお金になるので楽しいです。私のお小遣いにもなりますし魔法の練習にもなるので一石二鳥なのですよ。」

「ア…アレンちゃんが反抗期だわ…ど、どうすればいいのでしょうか？最近夫と一緒に寝てばかりでアレンちゃんと一緒に寝てないのがいけなかったのかしら…そうだわ、そうに違いないわ！今日は一緒に寝ましょうアレンちゃん！」

…どうという思考回路なんだろうかこの人は？適当に流してさっさとご退場願おう。

「わかりましたから母上、一緒に寝ますから今は鍊金の練習してもよろしいですか？」

「いいですよ、では今日の夜楽しみにしてますからね？私は今日の夜の分をしてもらいに行ってくるので部屋に来てはダメよ？」

「……はい母上」

母上よ…。精神年齢が20を超える俺だから分かるが普通4歳の子供に言う言葉じゃないだろう？

その夜は母上と一緒に寝たが昼間より肌がつやつやしていた。…父
上お疲れ様です…。

次の日も俺はいそいそと魔法の練習を頑張る。今俺の使える魔法は
『鍊金』『固定化』『コモンマジック全般』『ヒーリング』…くら
いか？まあ4歳にしては上出来ではないかな？鍊金は訓練というか
個人的な練習を続けているから他の魔法よりは素早く使えるし鍊度
も高い。

鍊金の練習してもいいんだが他の魔法の練習、もしくは新しい魔法
に挑戦したいと思う。んー…思いつくのは『ゴーレム』と…『ゴー
レム』と……あれえ？水の魔法がまったく思い出せない。水の
魔法とかヒーリング以外になにある？

ムムム…俺の少ない原作知識を絞り出すと水といえばモンモンとタ
バサくらいか？モンモンとかほとんど何もしてないしタバサは水と
風の混合スペルの氷を使ってるし……水魔法ってヒーリングと秘
薬だけで十分だな。

ってことはゴーレムでも作りますか。どうせ作るならフーケみたい

にただデカいだけのゴーレムじゃなくてギーシュみたいな精巧なゴーレムがいいな。幸い俺には美少女たちがうようよ出てくるようなアニメなどの知識があるからあまり難しいことではないだろう。ゴーレムとして俺の言うとおりに動かす。…なんか人間的に間違っただ道に進みそうだが…大丈夫…問題ない。

んー何がいいかなあ？ゴーレムは複数出してもいいがそれだと命令する俺が大変だしゴーレムに集中しすぎて俺が狙われて終わりなんてことにもなりかねない。ってことは1体、多くても2体。それが自立型のゴーレムを何とかして作るしかないか…。

自立型のゴーレムと言ってもアイデアないから却下。でも思いついたらやってみたいからやっぱ保留。ゴーレムを動かすのがどのくらい大変なのかとかがまったくわからないから最初は1体からやってみようかな。そうと決まれば後は外見を決めてやってみますか！

ゴーレム完成

ゴーレムを作ろうと思っていたから3日、いろいろなキャラを考えてはポイ考えてはポイしてついに俺は1つの物語からパクるキャラを決めた。

灼眼なあの子にしようと思う。ゴーレム＝戦闘要員ということを考えても灼眼の子はうってつけだろうしなにより可愛い。…まあ喋らないし、ぺったんこだけだな。さっそく作ってみよう！

………便利、魔法って便利！すぐ出来てしまった…確かに魔法はイメージが大切だというが灼眼の子…めんどくさいな…シャナの姿をイメージしてゴーレムを作ったら黒いマント？を羽織ったシャナさんが出来上がりました。まだ喋らないし動かしてないからピクリとも動かないけど。

早く出来すぎて暇になったな。どうせならもうちよっと拘ってゴーレムを改造しようか…。しかしさっきから何か足りない気がする。何だ…？何が足りない？黒いマント、黒い長髪、低身長、細身な身体、ぺったんこ、んん？特に問題はない…は…ず？

………はっ！！わかった、わかってしまった！！足りないのは…メロンパンだ！！！！

…「冗談はこれくらいにしてシャナと言ったら贅殿にえとのしやな遮那とコキユートスでしょ？…？あれ…ペンダント（あれはネックレスか？）の名称ってコキユートスなんて物騒な名前だっけ？…まあいい、ペンダントは飾りでいいとしても形だけは完璧に作ろう。贅殿遮那は等身大の大きさにして刀、さらに固定化をかければオツケーかな？

このハルゲニアでは刀はないけどたまたま場違いな工芸品を拾い形が綺麗で気に入ったからゴーレムに持たすため錬金で作ったとでもいえば大丈夫だろ。

メロンパンは…この世界にメロンパンなんてあるんだろうか？無いなら無いでもいいかもしれないけど完璧を求めるならメロンパンは必要…か？…つてかメロンパン持っても食べられないか、ゴーレムだし。まあ保留だな。

シャナと言えば黒髪黒目verと炎髪灼眼verがあるがどっちがいいだろうか？俺としてはどっちでもいいんだがどっちか選べと言われると選べない。どうするべきか…

悩んだ結果手加減するときは黒髪黒目ver、徹底的に潰す場合は炎髪灼眼verにしよう。そうすると炎髪verはさらに改造する必要があるそうだ。シャナの炎髪灼眼といったら炎、炎といえば火系統、火系統といえば…俺苦手ナンデスケド…

むむむ…

この時俺は失念してんだ……ここが家の敷地内で俺の前には動かない少女がいるわけで俺はその少女をガン見しながらウンウン唸っている。この状況をみて俺の両親や使用人が変な誤解をしないわけがないと……！！

ああそうさ、この状況をどう勘違いしたか知らないが（普通は勘違いします）たまたま目撃した使用人が他の使用人に報告↓更に俺の両親にも報告↓たまたま両親と会っていたジョゼフの耳にも入り面白そうだとノリノリ（なぜこんな時に我が家に王族が！？）↓俺の周りに隠れるように集合↓俺唸る↓少女微動だにせず↓俺の周り「ゴクリ……」↑今ここ

その後見られてることと誤解されていることに気付いた俺は必死に誤解を解こうと「誤解です父上、母上！あれは私のゴレムです！」「や「信じてください殿下！これにはわけがありました！」「など頑張ったんだが……無駄だったよ……。

後日俺に『女好き公爵息子（笑）』、『少女人形師（笑）』など不名誉な呼び名が我が家と王宮で広まった……。我が家なら……我が家だけならまだいい、だが王宮は無いだろう！！？王宮とかほとんどの有力貴族に知られるじゃん！！……ああもう疲れたよパト。ツシュ……なんだかとても眠いんだ……。……ん？何をくわえているんだいパ。ラッシュ？これは……メモか？なにになに『変態』……グッハア！

！！…パトラッ。ユ…お前もか…

さて日にちは変わって次の日、一応両親などの誤解も解け（解けたと信じてるぞ…！）俺は再度ゴーレムをどう改造する方法でも考えようか。

まず普通にゴーレムを作ってなんらかの方法で魔法を使わせるようにしてもそれは問題になるのだろうか？通常2つ以上の魔法を同時に使うことはできないらしいしゴーレムが魔法を使ったとしてもそのゴーレムは俺の土魔法によるもの。

ゴーレム生成魔法で1つ、ゴーレムが使った魔法で1つ、計2つの魔法を使ったと思われるロマリア辺りに異端だー！とか言われないかな？…言われたらめんどくさいな…

まあ言われたら言われたでいいか？なるべく公の場でゴーレムに魔法使わせなければいいだけの話だし使ったとしてもゴーレムが魔法を使ったの見た人はみんな潰せば問題ないな。

ん…それにしてもどうやって魔法使わせるかだが俺の精神力をゴーレムに貯めとくことってできるかな？でも精神力を作る器官？が身体の中にあるらしいからそれを模写してゴーレムに作れば貯めるだけじゃなく人間みたいに新たに精神力をつくることもできる…かな？

あ、魔法って精霊に語りかけて…というより精霊に命令っぽいこと

して使うつて原作、いやあれは原作をもとにしたSSだったか？で見た気がする。まあその世界と俺がいるこのゼロの使い魔の世界が一緒だとは限らないが多分おおまかなことは一緒だろう。…一緒だよな？一緒だと信じよう。

つてことはめんどくさいし細かい作業になる器官の生成はやめて精霊が集まってできるといわれてる風石を使ってみるか？まあ使うのは風石じゃなくて火石だけど。

…火石ってあるのかな？まあ風石があるんだから火石もあるでしょ。やっぱある場所は火山とかかな…？暑いんだろうなあ…父上に「火山に行きたいです！」って言うっても絶対許してくれないだろうし…

ゴーレム生成には関係ないけど折角だから風石、火石、水石、土石全部見てみたいな…あればだけど。

「父上火山に行ってみたいです！」

「…突然どうした！？お前火山がどんな場所だか知っているのか？その歳であんな場所行ったら死にいくようなものだぞ！！？」

まあそうなるよねえ…

「そうですか…なら父上！私は行かなくてもいいので火山にある（と思う）火石が欲しいのですがなんとかありませんか？」

「火石…？ああ確かにそんなものがあつたな。しかし何のために火

石なんか使った？特に使い道もないと思うんだが、どうしても欲しいならうちにくる商人に頼んでみるか？まあ商人が扱ってないならうちの私兵軍に火山に取りに行かせてもいい。アレンが行くよりよっぽど安心できる」

ふむ、まあ俺が行っても足手まといになるだけだからその方がいいか。商人が扱ってたら万々歳だし、うちの私兵軍も公爵家を守るため日々厳しい練習をしてる（らしい）から火山に火石を取りに行くだけなら何も問題だろ。討伐任務よりよっぽど楽だと思う。

「わかりました父上！それをお願いします。なるべく早めをお願いしたいのですが…よろしいですか？（ウルウル）」

「…早急に用意させよう」

「ありがとうございます父上！！（フツ…ちよろい）」

結果を言うと父上がありとあらゆる手を使ったらしくガリアの大半の商人に火石、なぜかおまけで風石と水石がついてきたらしいけど正直今は知らない。まあ今後なにかで使うかも知れないからラッキ―だと思おうかな。

あと父上は商人が持つてなかった時のために私兵軍も火山に向かわせたらしい。私兵軍も結構大量に火石を持つてきていたので割合にすると火石7：風石2：水石1くらいになっていた。土石がないのはよくわかんないけど地面や石とかと見分けがつかないのかな？風石なら緑、火石なら赤色だから土石ならきつと茶色とかで地面と同

化してそうだし。

ん？ちゃんと父上にはお礼しといたぞ？それに俺が滅多にしない抱きつきをおまけしといて。男が抱き着いても気持ち悪いかもしれないけど今の年齢なら全然オッケー。むしろ俺の武器の1つですが？父上は鼻から愛の結晶を流しながら喜んでくれたよ。

さて火石も想像以上に集まったしゴーレムでも作ってみようかな。火石を使う場所は髪の毛の部分と目の部分か？髪から火の粉を舞うようにしたいから髪の毛の部分は大量につかうとしよう。大量に使ったからって火の粉が舞うかはわかんないんだけどねえ…

火石を地面に置いて錬金すれば出来るか？出来なくても材料はいっぱいあるし失敗してもいいか。でも魔法はイメージらしいから成功する気がする。

「錬金！」

………うん、やっぱり魔法って便利。火の粉は舞ってないけど炎髪灼眼だし成功っていいでしょ！これで魔法が使えるれば完成だな。とりあえずまずは動かしてみないとだな。

「シャナ走れ！」

…おおかなり早い！！俺のシャナのイメージが現れてるのか？ってことは力も強いのか？

「じゃ今度はそこらへんにパンチ！」

…ふむ、大きなクレーターが出来たな、あまり人間相手に使うのはやめよ。それにしてもやっぱり魔法って便利だな…イメージしただけでこんな忠実に再現されるものなのか？

動きはパーフェクト、次は魔法だな。

「じゃ今度は魔法、ファイヤーボール！」

…ふむ、出たには出たな……。目からだけど…。ええ？普通手からじゃね？目からビーム状態だぜ？どうしようか…杖とかなんかわかりやすい媒体があれば大丈夫か？物は試しだな。贗殿遮那を持たせてつと…

「気をとりなおして、シャナ！ファイヤーボール！」

んー…何故か目と髪の毛の2か所からファイヤーボールが出てきた…。目はさつきも出てたからまあいいでしょう…。だがなぜ刀を持たせたら髪からもファイヤーボールが出るんだ！！？わからない…魔法が簡単なのか難しいのかわからない…

でも火石を使えばゴーレムからでも魔法が出来るということはわかった。ってことは何とかして髪と目を石無で赤色に、刀を火石を使っても銀色になるよう錬金できるようになれば完成だな。

考えた結果髪は土を赤土に錬金して使い、目は綺麗なほうがいいので赤土ではなくルビーを錬金して使用しることにした。ルビーは姿をイメージしてもなかなかいいのが出来るが化学式を思い出してそれも考慮し錬金するとさらに良いのが出来た。ちなみに何個か母上に没収された。この世界には無い、または貴重すぎてみたことがないらしく凄く喜ばれ驚かれた…なんとか誤魔化したよ…？月10個のノルマが俺に課せられたけど10個くらい簡単だし何にも問題ない。

あとすっかり忘れていたペンダントにもルビーを使うことにした。けどこっちは赤というよりうつすら赤まじりの黒、という感じなのでルビーをすつつつごく圧縮して黒くしてみた。大変だったけど納得の色合いになったので苦労したかいがあったというものだ。さらにルビーの真ん中に金を散りばめる様に錬金した。さらにルビーの外に金で線の模様を斜めにクロスするように錬金。最後に首に付けることが出来るようにチェーンをつければ完成！ふむ、ペンダントは完璧だな！！このペンダント売れば一生遊んで暮らせそうだな…。売らないけど！

残りは火石を使った贅殿遮那だけど…頑張ったが元の刀みたいに全部を銀色にするのは無理だった。なので刀身の中、つまり芯の部分を火石を使い赤色にし、周りの刃の部分は銀色にした。これはこれでなかなかカッコイイのでいいんじゃないんだろうか！いや全然いい！！

ということで庭にやってきました。今度こそ成功させてみせる！

まずはゴーレムとしてシヤナを生成！シヤナ自身には火石を使つてないのでわざわざ火石を地面に置いておく必要はないから生成が大分楽になった。ゴーレムに刀を持たせて…実験再開だ！

「シヤナ！ファイヤーボール！」

おお！ちゃんと刀から魔法が出てきた！完成だ…俺のゴーレムが完成した！！頑張ったか

いがあったなあ…喋れば完璧なんだけどゴーレムにそこまで求めちゃダメか。さっそく父上達に見せにいこーっと！…っとその前にシヤナにペンダントをかけて、よしっ！これで今度こそ完成だ！！

「父上！ついにゴーレムが出来たので見てください！！」

「アレンか、部屋に入るときはキッチンとノックをしなさい？公爵家のものがそんなことではダメだぞ？それはそうとゴーレムか…あの少女がアレンのゴーレムではないのか？」

「あ、すみません父上急いでたので。ゴーレムですがまああの少女？なのですがあれはまだ途中だったのです。それでさっき完成したのでみてもらおうと思って感想ほしいのですがいいますか！？」

「ほう、あれもなかなかしつかりしたゴーレムだと思うのだが？というかあれも4歳が作るゴーレムにしてはありえないほど良くできたものだったんだが…？とりあえず完成したゴーレムというのを見せてくれないか？」

ふっふっふ…聞いて驚け！見ても驚け！！これが俺のゴーレムだ！！！！

「わかりました！こいシャナー！」

呼び声と共にドアの前に待機させていたシャナが入ってくる。今回はさっきのまま連れてきたので炎髪灼眼＋贗殿遮那（赤）verだ。

「見てください父上！この精巧な身体！この綺麗な姿！可愛い顔！そしておまけですがどんな貴族も持っていない私オリジナルのペンダント！そしてこれも私オリジナルの武器！さらにこの武器は父上に頼んだ火石を元に錬金したのでゴーレムでも魔法を使えるという優れものです！さらに武器とペンダントは固定化がかかっていて壊れないようになっていきます！どうです父上！素晴らしくありませんか！！？」

「……………」

反応がない…ただの屍の様だ……。

「父上！父上！！せっかく頑張ったので感想欲しいのですが！？父上……！！？」

……ダメだなこりゃ……。しばらく帰ってこなそうだ、せっかく頑張ったし誰かに褒めてほしいんだけどなあ。そだ母上のとこ行こう！母上なら褒めてくれるでしょ！

「よし母上を探しに行くぞシャナ！着いてこい」

「母上！ゴーレムが完成したので見てください！」

「あら？アレンちゃんがゴーレムと言い張る少女ならこの前見たわよ？」

ふっふっふ…そんな戯言を言えるのも今日までだ母上！聞いて驚け！見ても驚け！そして褒めろ！！

「見てください母上！この精巧な身体！この綺麗な姿！（中略）素晴らしくありませんか！！？」

「あ、あらあ？本当にゴーレムなの？ちょっとさわってもいいかしら？」

「いいですとも母上！存分にさわってください！」

「んゝ確かにピクリとも動かないし瞬きもしてない、胸は…他の所より少し柔らかいわね…確かにこれはゴーレムだわ。このペンダントいいわね？アレンこれくれん」それはいくら母上でも無理です」
…ケチねえ…」

それは誰にも渡さん！俺のゴーレムの象徴の1つだぞ？渡す以前に同じものが2つあるのも許さん！！

「やっとゴーレムだと信じてくれましたか！それで私のゴーレムはどうですか？」

意外とドキドキする。俺の中では完璧だがこの世界で生きてきて他の人のゴーレムを見てきた人の目から見た俺のゴーレムはどんなふうに思われるのだろうか…

「そうねえ？ 凄い完成度じゃないかしら？ 強さはわからないけど外見と存在感だけなら私がみた中でナンバー１よ！」

「本当ですか母上！ それなら頑張ったかいがあります！！」

よっしゃ！ これでゴーレムは大丈夫だな。今度暇なときにでも父上に頼んでゴーレム対決させてもらおうつと。

後日俺のシャナに父上のゴーレムが瞬殺されて父上がしばらく部屋に引きこもったのはここだけの話。

アレン5歳になります

こんにちはアレンです。ゴーレムを作ってからいろんな場所を探検してます。父上のゴーレムを瞬殺したのが効いたのか領地内なら護衛なしでも行動してもいいことになった。4歳が1人で出歩いてんじゃねえとか思うかもしれないがシャナがいれば何の問題もない。最初護衛は文句言っていたがそんなやつらは潰してやったよ…シャナが。というかシャナで？

あれからも錬金したり錬金したり水の秘薬作ったり錬金したり錬金したりして俺のランクも土系統がラインの中位あたりに、水系統はまだドッドだけどそろそろラインになるのではないか、というところにいる。

そんな俺も明日で5歳になる。使用人は明日のパーティーの準備、両親は招待する貴族への手紙作成に忙しいらしいので結構暇だ。魔法の練習してもいいんだけど明日のパーティーまでは止めとけと親に言われている。なんでも精神力を使いすぎて体調を崩しパーティーに出られなくなったら大変だということらしい。まあそのせいで今俺が暇なわけだが…

なーにしょーかなー？…今思うとこの世界魔法があるから今まで楽しかったけど魔法が使えないとかなり退屈だな…。今度娯楽品でも作ってみようかな？あ、でもガリア王家にはチェスあるんだっけ？…ちよつとした娯楽くらいならあるのかな？まあ今無いんだから暇

なのには変わらないんだけど…

……もう暇すぎて無理だ、寝よ…

「アレ——やま、旦那——お呼——すよ。坊——ま？——てくだ
さい。」

「んんう…？なんだラードか、何の用だ？」

「おはようございます坊ちやま、旦那様が執務室まで来るようにとのことです。なんでも明日の事の最終確認をなさるそうですよ。」

明日のこと？なんか確認しなきゃいけないようなことがあったか？

「分かった、すぐ行く。ありがとなラード」

「もったいないお言葉でございます坊ちやま。失礼します」

公爵家として、というより貴族としては使用人にお礼なんてものは言うものじゃないんだけど前の記憶がある俺にとってはお世話になった人にはお礼を言わないとなんとなく気持ち悪いので家の中では言うことにしている。

流石にパーティーなどの他の貴族の目があるときは言わないようにしているけどね

「（コンコン）父上アレンです」

「アレンか、入っていいぞ」

「失礼します」

部屋に入ると正面にある机に父上が座っていてその隣に母上がいる。

「それで父上話というのはなんでしょうか？ラードは明日の確認とか言っていましたか何かありました？」

「うむ、そのことだが明日アレンは5歳になるわけだが、そのさいパーティーの主役として簡単なスピーチをしてもらおうと思う。我が家の嫡男であるお前を他の貴族へ紹介するためのものだから気楽にやってくれていい。今呼んだのは話す内容をある程度考えておきなさいと言っておきたくてな」

ええーめんどくさあ…。人前に出るのとかあまり好きじゃないんだけど…貴族に生まれたからしょうがないんだけど

「わかりました父上。話す内容はどのようなものが良いのですか？」

「そうだな…。大概は来てくれてありがとう、楽しんで行ってください。といった無難なものが多いな。アレンもそのような感じでいいんじゃないか？」

ふむ、じゃそのまま言えいいかな。考えるのもめんどくさいしそのくらいなら1分もしないうちに終わるから気が楽だしね。

「わかりました父上、ではそのそうにお礼と挨拶して終わりにしち

やいますね。その他になにかありますか？」

「ふむ、私からはこのくらいだが…エリーからは何かあるか？」

「そうですね、では私からも1つ。明日は他の貴族が大勢来るわ。当主や夫人はわたし達が対応するのであなたには必然的に嫡男、嫡女が群がってくるの。あなたはまだ幼いけど公爵家嫡男としてあなたの嫁になろうとする人や仲良くなっておこうとする人もいるでしょう。とりあえずバカなふりをするか適当に話を流してしまいいい？あとは笑顔でいれば大丈夫よ。」

母上…群がるとか嫁とか…4歳にはまだ早い話ではないですか？でも他の家の嫡男達もこういう教育されてんのかな？

「わかりました母上。適当に笑顔でいればいいってことですね？」

「ええそうよアレンちゃん。大変だと思っけど頑張ってね？」

「はい母上。ではもう部屋に戻ってもよろしいですか？」

「うむ、そうだな。明日のために今日はもう戻っていいぞ、ゆっくり休んでおくように。」

「わかりました、では失礼します。」

んーそういえば俺他の家に呼ばれたことないんだけどこれから呼ばれるようになるのかな？…めんどくさいな…

「本日は私アレン・ヴェルミナ・ド・ファイアのためにお越しいただきまことにありがとうございます。ごゆるりとお楽しみください。」

ふーこんな感じでいいのかな？まあ5歳にしては十分だろ。それにしてもさっきからわらわらとウザいな…ホントに母上の言った通り群がってきやがった、誕生日プレゼント貰えるのは嬉しいんだけどね。ちよつと開けてみたけどほとんどが同じようなものでトリステインの貴族からはマジックアイテムがほとんど、ゲルマニアの貴族からはなぜか場違いな工芸品もちろはらあったがやはり宝石類が多かったかな？ガリアからはワインなどの高級品が多かった。

さすがに大国ガリアの公爵とあって各国の有名貴族が多かったが正直あんまり覚えてない。原作メンバーにはまだ会ってない…はずだ。なにせ話しかけられても適当に流してたからもしかしたらそのなかにいたかもしれない、まあ別に絡まなくてもいいんだけど。

父上と母上は…げ、あれってヴァリエール公爵と烈風じゃね…？まためんどくさそうな人と話してんなあ。頑張れ父上！負けるな母上！俺はもう部屋に帰ろうかな…

大人SIDE

「本日はご子息の誕生日おめでとうフィア公爵。本当は娘たちも連れてこようと思ったんだが次女が体調を崩してな…長女も次女の付き添いで家にいると聞かなくてな。」

「申し訳ありません、来年は引つ張ってでも連れてきます。」

「これはヴァリエール公爵に公爵夫人よくぞおいでくださいました。ご息女の体調不良なら致し方ない。早く病気が治ることを心より願っているぞ。」

しかしあのアレンだからなあ…きつとトリステインのような魔法が使える貴族が偉い！みたいなのは嫌いだと思っんだが、使用人にもお礼言うくらいだし。私もあまりトリステインの考え方は好きじゃないがね

「ああ、水の秘薬を使ってもその場は治まるんだがまたしばらくすると再発してな。今度は高名な水メイジに来てもらって診てもらっ予定だ」

「そうか、次女は確かミス・カトレアだったか？彼女は今何歳になった？」

「カトレアは現在7歳だ。現在カリィヌの中にもう1人いるからゆくゆくは妹か弟ができるがな。今から楽しみだ」

「ほう、そちらもか？うちも今妻のエリーのお腹にいてな、そろそろ生まれるのだよ。」

それからうちの娘たちは可愛いだのうちの息子は優秀だだの子供
自慢になってしまったが話してみるとなかなか話のわかるやつでは
ないかヴァリエールよ！お前みたいな娘を大切にしてるやつは滅多
にいないぞ。今度ヴァリエール家のパーティーに参加してみるか！

こうして俺の誕生日は終わった。

「……………おい、これはどういうことだ駄魔神。」

「ちょっとおぬしを転生させるときミスってしまったの？ちーと？
とかいうのを付けようと思ったんだが出来なかったのじゃ。だから
こうしておぬしの魂がこの世界に馴染むであろう5年後の今こうし
て精神世界に来てやったということじゃ。」

「そうだよ！！この駄魔神俺のチート能力はどうなった！！？結構
楽しみだったんだぞこのやろー！！！！！！」

「うるさいのお…だから今ちーとをあげにこうしてここにいるんじ
やろつが」

え…？くれるのチート？え、マジいいの？俺無双っちゃうよ？5歳でトリステインあたり滅ぼしに行っちゃうよ？

「マジですか魔神様！」

「マジ、じゃ」

「おお！じゃあじゃあまず…」「あ、その前にいいかの？」

…つち、なんだよ今いい感じにテンション上がってきたのに…

「まず1つ目は最初転生させるときならまだ魂の許容量が決まっていないので能力やちーとは何でもよかったのじゃが転生してしまった今となつては許容量が決まってしまったての。もちろんわしの力で一般人よりはかなり大きくしてあるが限度がある。もしかしたら希望するちーとが与えられないかもしれないということじゃ」

な…なんだと…？つてことは強すぎる能力を選ぶと1つの能力しか使えないってことか。…まあいつか。チートないと思ってたんだから1つでもあるだけでむしろラッキーでしょ！

「あとは当たり前じゃが最初から強い能力もあるが大抵のは努力しないと強くないよ？つてことくらいじゃな。最初から強くもできるがその場合許容量を結構つかってしまうことになるのでな」

「わかりました。何個までっていう個数制限みたいのはあったりしちゃいますか？」

「おぬしが言う能力にもよるが個数制限はないのお。弱い能力なら許容量がいっぱいになるまで何個まででもいけるぞい。」

じゃー適当に欲しい順に言って許容量がいっぱいになったらその時考えよう。

「まずエヴァのATフィールドが欲しい！かなり強力なやつ！」

「そうじゃのう、お母さんが頑張ってる状態の時くらいなら許容量の80%は使うのう。カオル君くらいなら60%くらいじゃ。しかしおぬしの最初に考えた能力だからの。おまけして半分の許容量で出来るようにしてやったぞ。まあそのせいでおぬしの魂やばいくらいパンパンじゃがの。」

え？嬉しいけど魂パンパン！？…破裂しないよな…？んーでもどうしようか、この世界結構危ないからなあ…カオル君くらいでも十分だと思うけど半分にしてもらったわけだし念には念をだな。残り…えっと80の半分で40%使うわけだから60%か。60%もあればまだいろいろ能力付けられるし大丈夫でしょ。それにしてもお母さん無双状態のATフィールドで80%って俺の許容量多いのか？まあ半分になったしどうでもいいか。しかしATフィールドだけであのアルビオンの戦争歩いてても生き残れるよ

「ありがとうございます！！じゃお母さん頑張ってる状態の時の強さで！次は…とりあえず頑張ったら結果が欲しいから頑張ったら頑張った分だけ成長するようにしてくれないか」

「ふむ、そのくらいなら簡単じゃな。おまけで魔法と体術と武術の才能もつけて10%でいいぞ」

お思ったより少なくてすんだ。普通の人間がもってるようなものなら少なくないんだ。

「あと50%か…じゃナルトに出てくる万華鏡写輪眼が欲しい。イタチver.ので。できれば視力がだんだん下がるのを無しにして欲しいかな。」

「ふむ、万華鏡写輪眼なら30%で良かったんだがリスクなしになるとなあ…45%くらいは使わないと無理じゃな。」

「あと5%になるのはきついなあ…視力の代わりに精神力を消費して使えるようになるっていうのは無理ですか？」

「それなら可能じゃな。でもそれでも35%ってところか？」

「ならそれで頼みます。あと15%…んーなにがいいかなあ、物語の人物や動物、物などを召喚できるようなる！ってのは残りで出来ますかね？」

「無理じゃな…それは35%くらいは使わなきゃだのう。どうしてもというなら精神力をかなり使ってしかもちよつと弱体化、もしくは劣化したものになるかのお？」

おお！まあそれでも十分じゃないかな？精神力は頑張ってそこ上げすればいいし！

「流石！是非それでお願いします！！」

「あいわかった。おまけで召喚する時は精神力を膨大に消費するが1度召喚したものはおぬしが消すまで世界に残るようにしておこう。ただし召喚したものでこの世界に残せるのは最大で5個までじゃ。5個残した状態で召喚すると1番古いものが消えるからの？」

「わかりました！全然いいです。むしろ5個も残せるなんてラッキーです、ありがとうございます！！」

「いいんじゃないよ、本当はもっと能力をあげられたのにわしのミスでこんだけになってしまったのじゃから。ではもうおぬしと会うことはないであろうが代の人生を楽しむがいい。能力はおぬしが目を覚ましたら身体に宿っているから心配することはない。」

「本当にありがとうございます！！マジ駄魔神とかいって申し訳なかったです。」

「喜んでもらえたのならやったかいがあったというものじゃ。それでは達者での」

「はい！」

これで俺の時代がきたーーーー！！！！

「ほっほっほ、あんなに喜んでもらえるとの。あの世界では精霊いるようだし精霊に好かれるようにしておこうかの？そのくらいなら許容量なんぞ気になくても大丈夫じゃろ。ちょっとおまけしすぎた気もするがもともとわしのミスじゃしこのくらいはいいじやろ。ほいっと！これであやつには見えないが精霊には好かれてるはずじや。」

さてやり残したことは終わったしわしもさっさと帰るかのう

アレン5歳になります（後書き）

一応確認してますが誤字脱字ありましたらすみませんが教えてください。

新アレン

おはようございますアレンです。今日はこの世界に生を受けてからの5年間で1番目覚めが良かったと思う。なぜなら…そう私アレン・ヴェルミナ・ド・フィアはこのたび人間を卒業しました！…人間卒業するのは微妙だったかもしれないがだいたいは同じようなことだろう？なぜなら…俺はチートになったのだ！！

1度は諦めていたがまさかここにきて俺に能力がプラスされるとは思わなかったぜ。

俺の夢、いや精神世界だったか…の中で貰った能力を整理すると

1、ATフィールド（お母さん無双状態時と同等。実質無敵じゃね？）

2、万華鏡写輪眼（イタチver、視力は落ちないが代わりに精神力を消費する）

3、努力すれば努力した分能力などが向上する（おまけで魔法、体術、武術の才能を貰った）

4、物語の物、動物などを召喚できる（弱体化や劣化あり。さらに精神力を膨大に使わなければならないが1度召喚したら俺が消すまで残る。残せる数は最大5個まで）

ふむ、こう考えると十分だな。むしろやりすぎた感じさえでてる。このスペックがあればどんな世界でも生き残れる気がする。特に1が、1とか何のデメリットも無いし最高じゃん。許容量80使うのも領けるな、まあ半分にしてもらったら40ですんだんだけど。それにしても魂パンパンとかいってたけど大丈夫なのかな？

……うん、特にどこにも違和感ないし大丈夫でしょ！

折角いい能力もらったわけだしさっそく使ってみたい！でも流石に人に見せるわけにはいかないしどうしようかなあ…もう少し俺が大人になってなら新魔法、もしくは俺専用のオリジナル魔法を作った！…とでも言えば公の場で堂々と使えるんだけど…とりあえず今の俺には人が来ない隠れ家的場所が必要だ。どこかないだろうか？

まあいい、とりあえず今は朝ごはんを食べようじゃないか。

「おはようございます父上、母上。」

「おはよう、昨日は立派だったぞアレン」

「おはようアレンちゃん、そういえば途中から姿が見えなくなったけどどこに行ってたのかしら？」

…うん？なぜか母上の後ろから黒いオーラの様なものが見える…。
こ、これは漫画や小説などで良くある『私怒ってます』といわんばかりのアレなのか！？

「ええっと…ちょっと対応に疲れてしましまして…部屋に戻ってました…。」

「アレンちゃん…昨日は初めてだったので仕方ないと私は目を瞑りますが…こんどからは私や他の人でもいいから一言いつてから戻りなさい？あなたがパーティー会場にいないから心配したのよ…？」

そっか…そういえばあまりにもダルすぎて誰にも言わずに部屋に帰っちゃったからな…ラードにでも言っとけば良かった

「すみません母上、今度から気を付けます」

「今度から気を付けてね？じゃご飯食べちゃいましょう？」

それから始祖ブリミルに感謝の言葉を適当に言ってからいただきますと言って食べ始める。もちろんいただきますの部分は俺だけで周りに聞こえないように小声で言うか心の中で言うようにしている

貴族の食事は油っぱいものがほとんどだがもう慣れた。最初は朝からこってりかよ…とか生活習慣病まっしぐらじゃね？とか思っていたが意外と慣れれば朝からでも大丈夫。でもパンはあるのに米が無いのは辛い。元日本人の俺としては今後何とかして米を作らなければならぬ。幸い領地は有り余ってるらしいし平民に作り方を教えて作ってもらわなければ…。

デブになる心配も母上や父上、他の貴族などを見て綺麗な人は凄く綺麗だしカッコイイから問題ない。生活習慣病の心配もないと思う。

多分この世界の身体は食関係には強い身体なんじゃないだろうか？
まあ訓練や運動などをしないで食ってばっかいる奴はデブになるが
軍に入ったり魔法の訓練や内政で領地をあちこち移動したりしてる
人は基本的に細いしきつと問題はないと俺は考えてる。俺は嫡男だ
からそのうち内政もやらないとだし魔法の訓練も好きだからかなりの
時間やってるしね。むしろ油っこいものなどの栄養があるものを
大量にとらないとやっていけない。魔法って使うと結構疲れるんだ
ぜ？

しかもこれからは身体を使った武術とかも訓練内容に入れていかな
いとだからいっぱいだべないとガリガリになっちゃう……。細マツチ
ヨになりたい！そしてせっかくもらった能力なんだからほとんどん使
って敵なし俺TUEEEEEEEEEを目指すぜ！……まあもうすでになっ
てるようなもんなんだけどね。

あ、でも俺嫡男だけど内政とか策略とかは正直めんどくさいからあ
んまやりたくないんだよねえ……。その辺はあの無能王って呼ばれてる
ジョゼフにやってほしい。頭良いらしいし、でも接点は思い出すの
も忌々し例の1件でしかないんだけどね……。

そういえば俺の能力ほとんどが戦闘向きで生活向きのがないな……。ド
ラえもん召喚したら出てくるのかな？でもアイツいらないなあポケ
ットだけでいいし。まあ今のところドラえもんもポケットも召喚す
る気ないけど。内政用の能力も貰っておけばと思ったけどこの世界
には鍊金っていう便利魔法があるから大丈夫か。あとは元の世界の
知識を使えば大丈夫だろ。うる覚えで専門的なことは全然わからな
いけどこの世界の農業とかはひどいらしいから十分内政で活躍でき
る！と思う。

実際みたわけじゃないから今度見に行かなきゃだね。

庭に出てさっそく能力とやらを試そうと思う。まずは1番楽しみなATフィールドからやってみようかな？まずこれを完璧にしないとね。身の安全第一。

まずは確認くらいでいいから掌に出すだけでいいかな、大きいのも出せるとは思うけど今だしても意味ないし。…ちよつと緊張してた…

「…ATフィールド…ボソッ」

俺が言うのと掌サイズのATフィールドが出てきた。

おおおおおお！？ちゃんと出てきた！やる前はちよつと不安だったし技の名前とか言うの恥ずかしかったけどもうそんなことどうでもいいくらいテンション上がった！なにこれ超楽しい

ん？魔法の名前は恥ずかしくないのか？いいんだよ魔法は、ここは大人でも叫んだりしてんだから。でもATフィールドとかは俺だけだろ？聞かれたりしたら何か恥ずかしいし怪しまれるじゃん。そういえばATフィールドって他の人からも見えるのかな？あの作品の中では誰にでも見えてたけどここではどうなんだろ？まあ試すわけにもいかないしこれも保留だな

次は…写輪眼やりたいけど鏡ないし目の力を誰かに使うわけにもい

かないから保留。ってことはあと召喚能力くらいか？どんなやつ召喚しようかな…？

考えた結果ATフィールド繋がりにってことで使徒を召喚しよう！…
と思ったけど出てきて俺の言うこと聞いてくれるかわからないし攻撃されたら怖いしめんどいのでまずは弱い、もしくは攻撃してこなそうなのを召喚してみようと思う

イメージだ、イメージを固めるんだアレン！

「むむむ…召喚！」

するとポンッ！つという音とともに煙がでてきた。あ、やべ…俺の中で結構弱いイメージしたはずなのに俺死にそう…え？こいつでこんな精神力もってかれるの！？

召喚したやつは俺のそばにトットトットと寄ってきてクルックーとか言って俺の頭をつついてる。…敵対心は無いみたいだし多分これは俺の事を心配してくれてるんだろうけど正直邪魔…。俺今精神力空っぽに近い状態だから凄いだるいんだけど、まあ俺が召喚したんだからそんなこと思うのは違うか。だけどこれは精神力がかなり増えるまで召喚は禁止だな。

俺は力を振り絞り召喚した鳥の頭を撫でてみた。意外にさらさらで気持ちよかったがそろそろ俺の身体が限界らしい。もうだめだと目を瞑ろうとした時、こちらをじっと見つめている鳥と目があった、その時俺は不思議とそいつと会話ができた気がした。これが念話ってやつか？

《私は進化するたびにステータスが上がる。そして私はあと2回の進化を残している…その意味が分かるな？》

……お前はどのフ。ーザだ？お前はただのポ。ポだろ…。だが
…言ってることは間違ってる…

そして俺は力尽きた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2890v/>

ゼロの使い魔～自由に生きる～

2011年9月26日18時00分発行